



Title	地域文化としての方言と被災地の復興
Author(s)	中西, 太郎
Citation	宗教と社会貢献. 2025, 15(2), p. 55-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102820
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

地域文化としての方言と被災地の復興

中西太郎*

NAKANISHI Taro

1. はじめに

本発表では、東日本大震災の被災地の1つ、宮城県気仙沼市でのこれまでの筆者のフィールドワーク経験、とくに震災以前と、以後の現在に至るまでの地域社会の変容を見てきた中で気づくに至った「地域社会の復興過程におけることば（方言）の役割」をテーマにした講演を行った。

2025年1月に訪れた気仙沼市は、震災後14年間を経て、物理的なインフラも復旧し、気仙沼港を中心に甚大な被害を受けた地区にも新たな商業施設などが整い、筆者の目には、一見して地域の復興がなされたように映った。だが、地域を巡って、地元の方々に話を聞き、2024年にも実施した方言調査の結果を合わせて見ると、そのことに疑問が生じた。

はたして、気仙沼市の現状は復興を成しえたと言えるのか、筆者が専門とする「ことば（方言）」の側面から災害と「ことば（方言）」の関わりを整理し、現状を問うことで、地域社会の今後の課題を見出す。

2. 災害とことば—研究深化の背景と現状

前節で示した問題を考えるには、まず、災害とことばの関わりにはどのような側面があるのか、という前提の説明が必要になる。

そもそも、災害とことばの関わりを追究する研究は、阪神・淡路大震災以降、日本語を母語としない海外ルーツの人（非母語話者）に対して、迅速に災害などの情報伝達を行う手段として「やさしい日本語」の概念が提唱されたことに端を発する。これは、災害に際して、ことばに託した情報を、多種多様な人々に、どのように伝えるかということばの「伝達の側面」

* 東北大学大学院文学研究科・准教授

を問題にした研究の機運と言えよう。その後、弘前大学の佐藤和之氏を中心にしてその効果の実証的研究や、マニュアルなどの整備や普及が進み「減災のための『やさしい日本語』」が確立された〔弘前大学社会言語学研究室〕。さらに、東日本大震災に際しては、その成果が生かされるとともに、その有効性と必要性にますます注目が集まり、「やさしい日本語」は、災害場面のみならず、多文化共生化する社会における有用な情報伝達手段の1つとして、研究の深化、自治体への普及など、さらなる広がりを見せている〔岩田 2010 ほか〕。また、これらの動きとともに、災害時に必要なことばを解説した「災害支援カード」〔山下・高丸・中西・津田・椎名 2014〕のような情報取得支援ツールの作成も進み、多様な手段で情報を取得できる環境を整備する意識も高まったと言える〔NHK ほか〕。

一方、東日本大震災に際しては、非母語話者も含め多種多様な人々が被災したことで、災害とことばの問題は、対非母語話者のみならず様々な場面で生じ、南海トラフ大地震など、甚大な災害に直面する可能性がある日本において取り組まなければならない研究課題だという認識が強まった。その中で生じた研究課題の1つが、地域特有のことば「方言」をめぐるコミュニケーションの問題である。

これらの問題について、東日本大震災時、及びその後の取り組みの展開の中で向き合ってきた筆者は、特に、災害に際して方言が示す性質を(1) 伝達の側面、(2) 情意的側面、そして(3) 文化的側面という観点で整理して捉え、その性質の啓蒙、それにまつわる問題の解決を図っていかなければならないと考えている。次節以降、(1) ～(3) の観点で見た方言の特徴と、その課題を述べていく。

3. 災害とことばの関わりー伝達の側面

前節に記したように、東日本大震災の経験を通して、災害時に、日本人同士でも大小のコミュニケーションギャップが生じうる場面があることがわかった。外部からの支援者が、被災地の被災者と接する場面である〔東北大学方言研究センター2012b〕。甚大な被害をもたらす大災害では、被災地独力では復興に必要なマンパワーが足りず、支援者は全国から集まることに

なる。また、災害現場では、例えば、同一の職種・共通の知人などのコミュニケーションの手助けとなる文脈を共有していない人々が接触し、しかも被災者の求めに応じて、差し迫った様々な状況でコミュニケーションを交わす必要が生じる。言ってみれば、日常よりも母方言を異にする話者間のコミュニケーション摩擦が起きやすい素地があると言える。

震災後、いち早く被災地でその問題を聴取して洗い出した東北大学方言研究センターは、そのような方言によるコミュニケーション摩擦の解消を図るため、被災地（気仙沼市）の方言の特徴を解説した「支援者のための気仙沼方言入門」という支援パンフレットを作成し、地元自治体などを中心に配布する活動を行った〔東北大学方言研究センター2012a; 東北大学方言研究センター2012b〕。これは方言の「伝達的側面」を捉え、それに起因する問題の解消を図った事例と位置付けられる。さらにパンフレットに掲載した地元方言を話題にしたコミュニケーションの促進など、被災地での交流にも役立ったことが報告されている。

その後起きた、2016年の熊本地震に際しても、支援パンフレット（「支援者のための知っておきたい熊本方言」）を作成し、被災地に送る取り組みが行われた。そして、2024年1月の能登半島地震においては、「支援者のための知っておきたい能登方言」（図1）が作成され、オンラインでの配布^①を中心にして、支援者に広める支援の取り組みが行われた〔中西 2024〕。



図1 支援者のための知っておきたい能登方言（左：表面、右：裏面）

ただし、いずれも災害発生後の取り組みに甘んじており、これらの取り組みの有効性を最大限発揮するには、災害発生前に各地に支援パンフレットを用意する取り組みが必要という課題があるが、そういった備えがある地域は、全国でもごくわずか〔村上 2020〕にとどまっている。

4. 災害とことばの関わりー情意的側面

次に方言の情意的側面についての性質と課題について述べる。東日本大震災の直後、東北地方を応援するスローガンが各地に掲げられた。



図2 宮城県内の方言スローガン [魏 2011]

これらの中には被災地方言で書かれる「方言スローガン」[図2; 魏 2011: 77]もあったが、書き手は必ずしも被災地の方言話者ではなかった。しかし、この方言スローガンに対する印象を尋ねた調査によると、共通語のものと比べ、方言復興スローガンへ「親近感を感じる」という回答が多数を占め、被災者には概ね好意的に受け止められるということが分かった[東北大学方言研究センター2012b: 99]。これは、地元の方言を使用したメッセージが、被災者の心の支えになっていることを意味している。

また、東日本大震災後、宮城県名取市の市民団体「方言を語り残そう会」が出版した方言句集『負けねっちゃ』には、被災者の心情が方言で語られる句が数多く収められている。その内容は、亡くなった家族に向けての内容なども見られるが、日常に根付いたことばである方言で語られてこそ、そこに詠み手の感情が発露し、抱えきれない心の痛みを開放できるものになると言えよう。大震災を挟んで現在まで継続している「方言を語り残そう会」が、方言を資源にして様々な活動を展開した被災者支援の活動や方言の保存・継承の取り組み、方言を用いた社会活動などは、方言の力を利用した地域活性化のあり方の一形態を示している[櫛引 2025]。このように方言を用いた活動に、方言話者自身にも活力を与え、話者同士の連帯感を高める力があることは、石巻市発の地域コミュニティ再生プロジェクトとして始まった「おらほのラジオ体操」[おらほのラジオ体操実行委員会 2012]が、復興のシンボルとして被災地を越えて広まり、一大ムーブメントとなったことにも象徴されている。

災害の復興過程に、これら方言の情意的側面の性質を活かした取り組みが有効であるかを検証し、これまでの事例から次なる取り組みのヒントを見出すことも重要な課題と言える。

5. 災害とことばの関わりー文化的側面

最後に方言の文化的側面について述べる。2025 年 1 月現在、気仙沼港には次のような景観が見られる（写真 1）。



写真 1 気仙沼港の景観 [株式会社アール・アイ・エー]

中心に映る建物は「気仙沼市まち・ひと・しごと交流プラザ PIER7」という施設で、震災の被害を乗り越え、一時更地になっていた地区に建った交流拠点施設であり、まさに気仙沼の復興を象徴する建物と言えよう。ただ、震災以前の気仙沼港の風景と一変したことは事実である。震災以前の気仙沼の風景は、ここが気仙沼であるということを感じさせる地域アイデンティティを形成する要素の一つであったと考えられる。いずれ、この景観が新たな地域アイデンティティとなることは確かだが、現時点では以前のもののか

ら新生され、地域アイデンティティとなる途上にあるということである。このように地域アイデンティティにとって重要な物理的環境が、災害などによって一変し、新たなシンボルが人々の心象として定着するまで、何が、その地域特有の地域性を保証するのだろうか。その 1 つとして考えられるのが地域文化としての「方言」だと考えられる。例えば、気仙沼市の言語景観（方言景観）には、近年、気仙沼の方言を用いたものが散見される（図 3）。



図 3 気仙沼市の方言景観（左：「たばご」、右：「だれや」「寒ぐ」、筆者撮影）

気仙沼市で人気の弁当屋「たばご屋」は「ご飯の間に食べる軽食」を意味する方言の「たばご」を店名に冠している。また、「氷の水族館」の案内板には「だれやこんなに寒ぐしたの」と方言で広告メッセージが書かれている。他にも市内には方言を用いた方言景観が見られたが、これは 2006 年に筆者が気仙沼市を訪れたときには見られなかった光景である。これらの方言景観は、方言が用いられる土地であることを筆者にも感じさせてくれる。さらに言えば、それは地元の人々にとっても同様であり、加えて、目で見る光景だけでなく、日常生活で周囲に気仙沼方言が絶えず聞こえてくれば、その実感が増すことは間違いない。耳で聞く方言もまた地域性の一側面を築く。

東北大学方言研究センターは、東日本大震災後、地域の文化の 1 つとしての方言の衰退が加速するという予測のもと、文化庁の委託事業の支援を受けて、気仙沼市を含む被災地の方言の記録、保存の取り組みに注力している。その取り組みの 1 つが、地域の言語生活をありありと思い浮かべられるよ

うな記録を目指し、100以上の多様な場面を収録した『生活を伝える方言会話』である〔東北大学方言研究センター編 2019〕。そういった保存活動の成果が蓄積する一方、2024年度の気仙沼市での方言調査の結果によれば、気仙沼方言は数多くの調査項目で伝統的方言のあり方を変容させていることが明らかになった〔東北大学方言研究センター2025〕。

近年、人口減少の問題を抱える気仙沼市にとって、ここにしかないという地域性は地域のアイデンティティになるとともに地域の魅力とも映り、その点で、人々をつなぎとめる紐帯となりうる「文化としての方言」の衰退は、多大な損失とも言えるのではないだろうか。被災地方言の保存・継承活動を続ける研究者は、被災地の復興にはインフラの復興だけではなく、心の復興もまた重要であり、地域文化の活性化が欠かせないとも述べている〔大野・竹田・小島 2018〕。地域方言もまた、まぎれもない地域文化の1つであり、さらなる記録・保存を進め、方言の価値の啓蒙や次世代への継承活動を展開していくことが求められる。

6. おわりに

以上、発表者の専門とする「ことば（方言）」の側面から災害と「ことば（方言）」の関わりを整理し、現状を問うことで、地域社会の今後の課題を見出してきた。これらの取り組みの成果と課題からは、現在、復興の過程にある能登半島のよりよい将来のために生かせる知見も見出せるはずである。

註

- (1) 「支援者のための知っておきたい能登方言」は東北大学方言研究センターのWebサイト『東日本大震災と方言ネット』（<https://www.sinsaihougen.jp/>）で自由にダウンロードして利用できる。

参考文献

- 岩田一成 2010 「言語サービスにおける英語志向ー『生活のための日本語：全国調査』結果と広島事例から」『社会言語科学』13巻1号、pp.81-94 社会言語科学会。
- 岩田一成・梶田直美 2020 『「やさしい日本語」で伝わる！公務員のための外国人対

応』学陽書房。

大野眞男・竹田晃子・小島聡子 2018 「岩手県沿岸被災地の小・中学校における方言理解教育の支援」『第2回実践方言研究会・資料』。

おらほのラジオ体操実行委員会 2011 『おらほのラジオ体操』エムオン・エンタテインメント。

魏ふく子 2011 「方言は被災者を支えることができるか」東北大学方言研究センター『東日本大震災と方言』東北大学国語学研究室。

櫛引祐希子 2025 「地域住民と共に紡ぐ方言の記録と継承」『東北大学方言研究センター開設20周年国際シンポジウム「社会とリンクする方言学」資料』。

多文化共生リソースセンター東海 2013 『「やさしい日本語」の手引き』愛知県県民生活部社会活動推進課多文化共生推進室。

東北大学方言研究センター 2012a 『支援者のための気仙沼方言入門』東北大学国語学研究室。

2012b 『方言を救う、方言で救う—3.11 被災地からの提言』ひつじ書房。

2025 『東日本大震災被災地方言の記録・継承のための調査研究3』東北大学日本語学研究室。

東北大学方言研究センター編 2019 『生活を伝える方言会話〔分析編・資料編〕—宮城県気仙沼市・名取市方言』ひつじ書房。

中西太郎 2024 「防災・復興と方言」『日本語学』第43巻3号、pp.70-79 明治書院。

方言を語り残そう会 2012 『負けねっちゃん—大震災五七五の句集』銀の鈴社。

村上敬一 2020 「支援者向け方言パンフレットの作成」小林隆・今村かほる編『実践方言学講座 第3巻 人間を支える方言』くろしお出版。

山下暁美・高丸圭一・中西太郎・津田智史・椎名渉子 2014 『災害支援カード—もっとやさしい日本語訳付き』明海大学。

株式会社アール・アイ・エー『気仙沼市まち・ひと・しごと交流プラザ PIER 7』(<https://qr.paps.jp/gSZiP/>、2025年4月25日アクセス)

弘前大学社会言語学研究室『減災のための「やさしい日本語」』(2020年1月Webサイト閉鎖、2020年2月1日アクセス)

NHK『NHK NEWS WEB EASY』(<https://www3.nhk.or.jp/news/easy/>、2024年4月25日アクセス)